

## ■第十五章 本質 (essence) の考察

この章では「本質」が扱われる。常に変わらない、普遍的な性質というものが本質であるが、本質とは、つまり「実体」の別名であり、「絶対的な真実」とも同じものである。いつものようにナーガールジュナはここで、本質という概念や、本質的な事物という考えが矛盾していると主張している。そしてもう一つの大きな狙いは虚無主義の否定である。虚無主義の言い方である「非実体」や「非存在」――まったく存在していないもの――という概念も同じく矛盾していると主張しているのである。虚無主義というものは、実体的に物事をとらえた場合の、実体主義の否定形に過ぎないのであって、我々には正しく主張できない類の論法なのである。「本質的に存在しない」というような絶対性を帯びた虚無主義の表現そのものがおかしいのである。

### 1. 原因 causes and conditions (因縁) から生じる

本質という考えは意味を成さない

もし本質が原因から生じるなら

それは組み立てられたものだということになるだろう

### 1. 意識

原因に依存して成立するような本質というものはあり得ない。もし本質が原因に依存して成立するなら、そうした本質というものは、(原因と結果という関係に分解できるわけであり、要素としての部分に分割可能であるので、)部分によって組み立てられたものだということになるだろう。

本質というものは、何にも依存せず、そのもの単独で独立して存在しているはずである。少なくともナーガールジュナの言う本質とはそういうものである。したがってもし因果関係によって成立しているのなら、そのものは原因に依存しているのであり、単独のものではあり得ない。

2. 組み立てられた本質などというものを  
どうしたら認められるというのだろうか  
本質はそれ自体が人為的なものではないのであり  
他のものに依存したりはしないのである

## 2. 意識

部分の合成によって組み立てられた本質というようなものを、どうしたら認められるだろうか。本質というものは人間が概念によって人為的に切り分け、組み立てたものではないはずである。他のものに依存したりはしないのである。

原因によらず、他のものに依存せずに独立しており、組み立てられたものではない。これがナーガールジュナの言う本質である。原因によらないということは、因果関係に関係なく存在しているということであり、個々の概念同士の因果関係を用いてしか認識というものを行えない人間という意味では、人間が存在していなくても存在しているもの、という意味になる。組み立てられたものではないというのも、組み立てるということは、人間が概念に分割された部分によって組み立てるという意味であるから、原因によらないのと同じことである。他のものに依存しないというのも、他のものというのは原因であったり、部分に分割された概念であったりするわけであるから、これも同じことを言っていることになる。

3. もし本質というものが存在しないのなら  
実在 entities における差異というものはどうして成立し得るだろうか  
実在における差異の本質が  
差異の実在と呼ばれるものなのである

## 3. 意識

もし本質というものが存在しないのならば、個々の実体的な事物についての差異というものがどうして成立し得るだろうか。個々の実体的事物についての「違う」ということの本質が、「差異の実体的存在」と呼ばれるもののはずである。

4. 本質、もしくは他者性の本質 otherness-essence を持たずに  
どうやって実在が成立し得るだろうか  
もし本質と実在とが存在しているなら  
実在は確認されたものとなる

#### 4. 意識

本質、もしくは「違っているという本質」を持たずに、個々の実体的な事物が成立するということはないだろう。本質というものと個々の実体的事物とが（両方）存在するときに、個々の実体的事物というものが成立するのである。

固有の本質を持った事物と、実体的に存在する事物とは同じものである。本質を持った事物が実体なのである。

5. もし実在が確認されたものではないのなら  
非存在 nonentity も確認されたものではない  
異なったものになった実在が  
非存在だと人々は言う

#### 5. 意識

もし実体的な事物というものが証明できないのであれば、非存在というもの（の実体的存在）も証明できないはずである。実体的な事物とは本質的に違っている事物（実体論者はそれを「まったく存在しないもの」と言うが）のことを、人々は「非存在」と呼ぶのであろうから。

ここでナーガールジュナが「非存在」（実体の否定形で表された語）nonentity と読んでいるものは、実体の性質を持たない空なる事物という意味ではなくて、「本質的に実体でない」という性質を持っている絶対的なもの、という意味である。つまり実体論者の言う実体以外のものであり、彼らの発想では通常、「まったく存在しないもの」のことである。これは虚無論として、究極的には事物は「何も存在しない」と言うことに発展する。

## 6. 本質と本質的差異

および実在と非存在を見る者は  
ブッダによって語られた  
真実を理解することはない

## 6. 意識

本質があるとか、本質的に違っているとか、あるいは実体的な事物が存在しているとか、実体でない事物が絶対的に存在しているとかいうように物事を理解する者は、ブッダが語った真実を理解することはないであろう。

## 7. カーティヤーヤナ Katyayana の説法で説かれる

現実と非現実の認識を通して

勝利を得た者 Victorious one は

「存在 it is (そうである)」と「非存在 it is not (そうでない)」の両方を論破したのである

## 7. 意識

カーティヤーヤナでブッダは、現実と非現実についての理解に基づいて、「実体的実在」と「絶対的非存在」の両方が誤りだと論破したのである。

ブッダはカーティヤーヤナの説法で、事物が固有の本質を持って存在すると主張することは実体論的極論であり、反対に事物は究極的には何も存在しないと主張することは虚無論的極端であるり、どちらも間違いだと述べている。

パーリ語正典の中には、実体的に事物をとらえることは無常というものを間違っ理解することから生じており、それは事物への執着という苦しみへと導くのであり、また虚無的に事物をとらえることは事物の経験的リアリティについて間違っ理解することから生じており、それは人生を意味のないものだと思ってしまう苦しみへと導く、とブッダが述べたと書かれている。1 これは中観の見方を支持する見解である。

1. Gerfield p.223

8. もし実在 existence が本質によって存在するのなら  
非存在 nonexistence というものは存在しないであろう  
本質における変化というものは  
決して主張できるものではない

#### 8. 意識

もし事物が本質を持って存在しているのなら、（すべてのものが変化せずに存在し続けているはずであり、）その反対の、「本質を持っては存在していないもの」などというものが存在する余地はなくなるだろう。本質というものは変化しないものであって、変化する本質という考えは正しくないのである（から、ある事物は本質を持たなくなる、などという事態は起きようがないのである）。

9. もし本質が存在しないなら  
どんなものが他のものへと変化するのだろうか  
もし本質が存在するなら  
どんなものが他のものへと変化するのだろうか

#### 9. 意識

（これについて反論者はこう言うだろう。）もし本質が存在しないなら、（変化という事態の本質も存在しないことになるので、）どんな事物も他のものへと変化するということは主張できなくなるのではないか。（しかしそれはおかしい。）もし本質が存在するならば、本質は変化しない普遍的な性質なのであるから、どんな事物も他のものへと変化することができなくなるのである。

10. 「それがある it is」と言うことは、永続性をつかまえることである  
「それがない it is not」と言うことは、虚無主義を受け入れることである  
したがって賢い者は  
「存在する exists」とか「存在しない does not exist」とか言わないのである

## 10. 意識

「事物が実在する」と表現すれば永続する実体を信じることになる。反対に、「事物は存在しない」と表現すれば、何も存在しないという虚無主義を受け入れることになってしまう。したがって賢い者は、実在するとか存在しないとか言わないのである。

## 11. 「なんであれそのものの本質をもって存在するものは

非存在 nonexistent にはなり得ない」と言うのは永続主義 eternalism である

「それは以前には存在していたが、今は存在しない」

と言うのは虚無主義が持つ過ちを犯している

## 11. 意識

本質を持って存在する事物は、変化せずに存在するのであるから消滅もせず、存在しないものになることはない、こう表現する者は実体論者であり、事物の永続を信じる者である。反対に、（事物が本質を持つという考えを肯定した上で、虚無主義の立場に立ち、）ある事物は以前には存在していたが、今は消滅してしまったので存在していない、と表現するのが本質的に正しいのだと言う者は、虚無主義が陥りやすい矛盾した言い方をしているのである。（なぜなら、事物が本質を持って存在しているならば変化はしないはずであり、今存在していないのなら過去にも存在していなかったはずであり、虚無主義を主張するならば、どんなものも最初から存在してはいなかったと言わねばならないはずだからである。そうなると、存在するという概念なくして、存在しないという事態だけが存在すると主張することになる。）